
すこし引っ越す

N . r i v e r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

カンバスにはとりとめもない色がぶちまけられていた。

隅から隅まで、本当に思い付きのように。

それを巧みだ、という識者もいれば、趣味じゃないねと肩をすくめる若者に、いくら値がつくんだねとアゴをさする商人まで反応は様々だ。

カンバスはぼくの家からも見える位置に置かれていたし、それは無視できないほど巨大なもので、もしぼくの家があと数十メートルでもカンバスに近ければ一日中その影の中に家がおさまってしまうほどだった。

そんなぼくのカンバスへの印象が気になるようだから簡単にまとめておけば、嫌いじゃない。でも手放したくない、と思えるほども好みではなかった。きつとこうして間近に毎日見ているせいだ。だいぶと鼻肩目が混じって、こんな曖昧な印象しか持てなくなってしまうたんだらう。仕方ない。嫌いになんてなるうものならそれでも毎日、目にするのだ。やりきれなくなるか、気が狂ってしまうに違いなかった。

だからだらうか。

ある日、事件は起きた。

カンバスへ落書きはされたのだ。

見つけたのはカンバスを大変気に入っている識者だった。ぶちまけられたとりとめない色の中に追加されたそれを見つけていた。これはまったくもって専門家でしか気づけないような些細なもので、専門家が声を上げたからこそ落書きは大問題へと発展していった。

もう大変だ。ぼくの家をのりでさえその落書きを一目、見ようと世界中の物好きたちが押し寄せて、記者たちは取材合戦を繰り広げ、中継の甲高い声をかき消し上空ではヘリが舞った。こんなひどいことを、と事態へ憤る声は重なり、歴史がけがされた、価値が落ちた、醜悪だったセンスがさらにその醜悪さを増した、と乱されたこれまですべてをそれぞれが罵った。

だからだらう。やがて人々の興味は落書きの事実から落書きをし

た何某へ移ると、ついに犯人捜しは始められる。ぼくだって毎朝、通勤の度にその前を通るなら、容疑者の一人として足止めを食らわされ、供述をとられるほどだ。

「冗談じゃない。こちとら無視できないから押し付けられるがまま受け入れて、嫌悪も興味も持たぬようつとめて日々をつつがなく過ごしてきたのである。だというのに疑われるなど、むしろ平穩だった日々を乱され迷惑しているのはぼくの方で、望まぬぼくにわざわざ落書きをしに行く動機なんてありはしない。

一体誰だ。

ぼくでさえ犯人捜しをしたくなる。

騒ぎが収まる様子がないまま季節は廻る。

いつしか書き加えられた落書きもまたぶちまけられた色の一つとして馴染み始め、騒ぎだけが騒がしくぼくの日常を変えていた。

もっとまじなカンバスを見上げたかったな、と初めてハッキリ心の中で呟いてみる。けれどこんなに大きなものはもうどこへも動かせず、家とその影に飲み込まれずに済んできたことをただヨシとした。

同時にぼくは引越すことを考え始める。

家族へおそろのおそろの打ち明けて、涙ぐむ妻に手を握られて決意を固めた。

とはいえ巨大なカンバスだ。勤め先を変えない限り、ぼくの視界には押し入ってくることだろう。けれど気分転換はぼくにも家族にも必要で、大冒険への旅立ちのように浮足立って引越しの準備を進める。

引越し先はほんの数キロ先、よく日の当たる土地に建つこじんまりした庭付きの一軒家だ。借りたトラックの荷台へ家具を積み込み固定する。家族を乗せて長らく世話になった家を後にすれば、道

すがらどんどん大きく近づくカンバスがぼくの視界に反り立った。落書きの前には数人、吟味して眺める人影もまだ見受けられる。

ご苦労なこつた。

そんな光景にまたうんざりして、カンバスの端から端へと家財道具を揺らしぼくはトラックを走らせた。

と、向かいから背を丸めた年寄りはやってくる。

カンバスの縁をなぞると裏からひよっこり姿を現したのだ。

ボロをまとったような身なりはお世辞にも裕福には見えず、丸めた背のせいでうつむいているのだからなおさら印象は暗かった。

だがぼくは目を見張る。

そのボロにはカンバスにぶちまけられたのと同じ絵の具が飛び散っていて、年寄りは自分の頭ほどの大きさの濡れた筆を背に乗せていた。

かと思えば背から筆はを振り上げられる。

すれ違いざまだ。

カンバスへと叩きつけた。

瞬間、飛び散る飛沫はそのひと滴、ひと滴が異なる色をしている。だから万華鏡と、年寄りの周りへいつとき極彩色は広がった。カンバスへ食らいついた絵の具もまたひと筆で七色を刻むと、滴り降り注いだ絵の具で地面を花が咲いたように彩る。叩きつけた年寄りはいえ顔を上げて様子を確かめようとしめない。込めた気迫は筆でカンバスを裂くのかと思うほどだ。突き立てた筆ごと果てへ向かい歩き始めた。

七色の帯がじわじわと、カンバスに伸びてゆく。

ぼくは目が離せず、振り返ったところで金切声を上げた助手席の妻に呼び戻されていた。

塗りなおされてゆくカンバスからトラックは離れゆく。

とりとめない色はしかながら弾ける鮮やかさで、遠ざかるうとも背後でバチバチ音を立てていた。

聞きながらぼくは残念にまみれる。

新しくなったカンバスを間近に生活できたのだ。前にしたならうんざりしていた日々もまとう新しさと変わっていたのではなからうかと思う。落書きの呼び込んだ不穏も何もかもを飲み込んで塗りつぶし、新たな日常としてぼくに未来を与えてくれたのではなからうかと想像する。あれだけ従順と受け入れてきたのだ。多少の愛着くらはいは残っていてもおかしくない。

けれど確かめることはもう無理だった。

明日、少し離れた場所からこの一大事が見守られるのか、それともまた新たな火種ととり立たされるのか、ひっそり眺めていようと思つ。

そしていずれだろうと世界は変わった。

祝うほかない。

「おい、見えてきたぞ。新しい家だ」

うながしぼくは指さした。